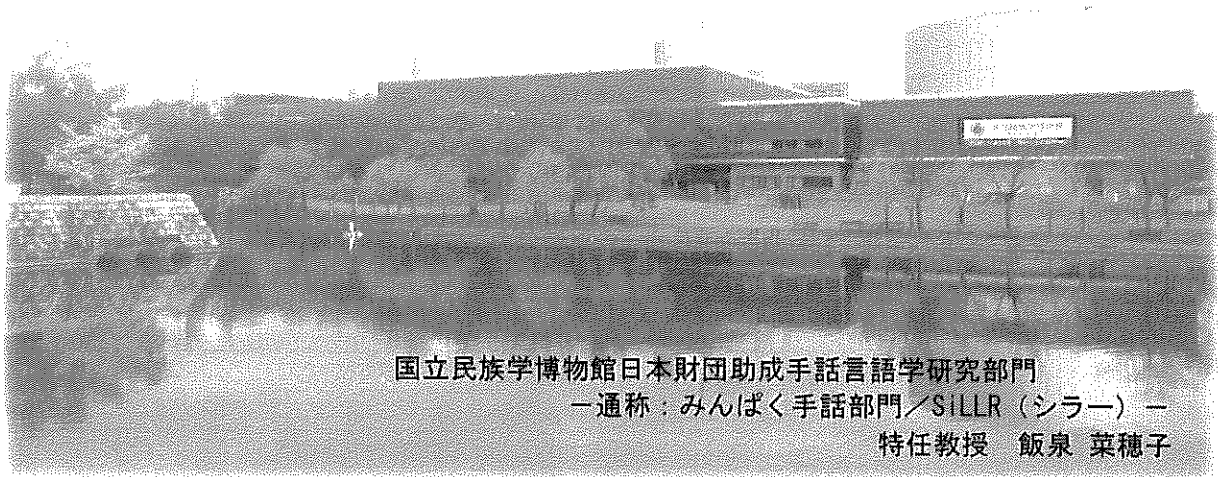


みんなくでの学術手話通訳養成事業の取り組み③



国立民族学博物館日本財団助成手話言語学研究部門
一通称：みんなく手話部門／SiLLR（シラー）
特任教授 飯泉 菜穂子

学術手話通訳「研修」事業・・・・・・・・・・・・・・・・

みんなく手話部門（SiLLR）では、スクリーニング（選考試験）を経た現役手話通訳の方に、年間を通して「学術手話通訳研修」を提供しています。対象は「学術手話通訳分野への関心を有する」「聴者の手話通訳」の方です。スクリーニングに合格された方には「みんなく学術手話通訳研修員」として、年間7・8回の研修および関連事業（講座・国際研究集会など）にご参加いただき、学術手話通訳技術の習得とブラッシュアップに努めていただきます。研修員として一緒に学んでいただく期間は概ね3年間。研修員修了後には、みんなくをはじめとした「学術手話通訳」が必要とされる場面で学術専門通訳として活躍して下さることを期待して事業運営をしています。

これは関西地区に限らないことですが、現状では、学術分野に習熟した手話通訳者が必要な場合、利用者のニーズに十分にお応えするためには、どうしても、通訳者を学術分野での修練を積む機会の多い首都圏からお願いせざるを得ない…ということがあると思います。SiLLR 研修員応募の際に居住地は問うていませんが、みんなくは関西地区にある機関ですから、主に関西地区における通訳環境の整備…そうですね、具体的に言えば、関西地区で手話通訳を必要とする「学会」や「研究集会」が開催される際に、関西の人材で学術手話通訳者が手配できるような環境の実現に寄与したいと思っています。

「研修」内容 (<http://www.sillr.jp/sillr013.html>)・・・・・・・・

これまで「研修」事業は、毎年秋（概ね9月末）に SiLLR が実施している「手話言語と音声言語に関する民博フェスタ（国際研究集会、通称 SSSL）」（2017 年度についてはこちら→<http://www.sillr.jp/ssll2017/index.html>）に、研修員の皆さんが JSL（日本手話）通訳として登壇

して下さることを目標の一つとしてきました。そのため、スクリーニングを実施する5月以降 SSSL での通訳終了後のフィードバックまで、約半年の間に、一月に1回か2回、週末の日程を丸一日使って、集中して研修を実施しています。

内容としては、まずは、実践的な実技研修。スクリーニングにおける筆記・実技試験(後述)の振りかえり、通訳事前資料(学術論考)の読み込み方の検討、日英同時通訳を介してのリレー通訳体験、SSLLにおける学術手話通訳の準備、実践、振り返りなどです。これらの実技研修では、「研修」事業運営メンバーおよび外部の、手話通訳養成・手話言語・手話言語周辺

領域の専門家による具体的なフィードバックを実施しています。「研修」では、様々な専門家からのレクチャーも用意しています。ろう(手話話者)の研究者が学術手話通訳者に求めるものについて、海外の学術手話通訳事情について、音声言語(主に日英同時)通訳における学術通訳者のあり方についてなど、専門家からお話しいただきます。

学術通訳 OJT 場面の設定・提供・・・・・・・・・・・・・・・・

前述したように、SiLLR 学術手話通訳「研修」事業は、学術手話通訳の職業化を目指すトリアルという性質ももっています。そのため、「研修」に組み込まれている SSLL 以外にも、みんなく内部、時には外部からの学術通訳依頼を OJT としてお受けして、研修員の方に現場に立っていただいています。必要に応じ

て事業コーディネーターである私自身がいわゆるメンター役割を負って研修員に同行いたしますし、OJT 通訳終了後には必ずフィードバックの時間を設けます。このメンター役割については、少しずつ「研修員修了者」の方にも協力していただくようにしていきたいと思っていますところ です。

研修成果として期待するもの・・・・・・・・・・・・・・・・

これらの「研修」を通じ、研修効果として期待することは以下のような内容になりましようか。

- ・ 学術手話通訳現場での通訳パフォーマンスの向上
- ・ 学術手話通訳に必要な事前学習(準備)、資料読み込み力の習得
- ・ (終了後の振り返りを行うことによる)手話通訳パフォーマンス相互検証・自己検証力の向上
- ・ 学術手話通訳現場に相応しいふるまいの習得
- ・ プロ学術手話通訳者としての自覚の醸成

- ・ 手話通訳者同士のパートナーシップ・チーム力の向上
- ・ 手話通訳コーディネーター・エージェントの正しい有効活用術の獲得

学術手話通訳というと、専門領域性が高く日常の手話通訳実践とは結びつけにくい…と考える方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、こうして列記してみると、決してそうではなく、「良い通訳」として必要とされ習得を目指すべきスキルは、どのような通訳領域であって共通するものなのではないか、と思わされます。